台大日本語文研究第 16 期
2008 年 12 月，頁 1-12
2008 年「台大日本語文創新國際學術研討會」（2008 年 5 月 31 日）特別寄稿

# 日語在台灣的越境

蔡茂豐*

## 摘要

日本當前流行語「語言越境」一詞，主要討論的是外國人在日本以日語寫作獲得文學獎項的經緯。本文藉此提出日據時代以至戰後，以日語寫作之台灣作家獲得文學獎項之肯定，亦屬語言越境。

關鍵詞：「語言越境」、李比・英雄、日本語文藝誌、邱永漢、陳舜臣

* 東吳大學日本語文學系客座教授

# Boundary-crossing of Japanese in Taiwan

Tsai, Mao-Feng[*]

## Abstract

“Boundary-crossing of language,” a popular term in nowadays Japan, opens up a new discussion about foreign laureates of Japanese literature prices. This study intends to posit another mode of boundary-crossing within the Japanese language by inquiring into the historical context in which Taiwanese writers gained recognition in Japan for their work written in Japanese during the Occupation till the post-war era.

Keywords: boundary-crossing, Lan Hideo.Levy, Nihonbungeishi, Chiu Yung-Han, Chen Shun-Chen

[*] Guest professor of the Department of Japanese language and literature Soochow University

# 台湾における日本語の越境

蔡茂豊*

## 要旨

「ことばの越境」が流行語となっている。アメリカ人のリービ・英雄が日本語で小説・随筆などを書き、日本の文学賞を受けたことによる。

植民地時代から戦後にかけて、日本語で小説・随筆などで文学賞を受けた台湾人は幾人もいる。

本論文はそれを取り上げ、アメリカ人に限ったことではないと指摘した。

キーワード：「ことばの越境」、リービ・英雄、日本語文芸誌、邱永漢、陳舜臣

* 東呉大学日本語文学系客員教授

# 台湾における日本語の越境

蔡　茂豊

## 一、初めに

この三月八日、東海大学日文系で国際学術シンポジュウムが行われた。メーンテーマは「ことば・人・越境」であった[1]。私も特別講演に呼ばれたが、テーマは「『国語』強制の下における方言の抑制―台湾の場合―」とした。内容は主に台湾に越境した日本語と北京語とがどのように台湾方言を抑制したかを取り上げたものであった。

本日は「ことばの越境」について敷衍し、植民地時代の日本語と戦後の日本語が如何なる形で台湾に越境したかを話してみたいと思うのである。

「ことばの越境」とは割りと新しい用語である。どうも日本語で創作するアメリカ人作家のリービ・英雄と密接な関係にある。

## 二、越境

「越境」は境界や国境を越えて他の地域や国に入ること（集英社―国語辞典）。他に「越境入学」があって、決められた学区以外の小学校・中学校・高等学校に入学すること（同上）をさす。どうも日本語には、「越境」に関連することばは少ないようである。

普通、人の越境は使い慣れているが、「ことばの越境」は意外と聞きなれない。これは正しくあることばが境界や国境を越えて他の地域や国に入ることを指していったものである。しかし、アメリカ人のリービ・英雄が日本語で小説やエッセイを書いて、一躍有名になり、外国人が日本語で文章を書くことは一種の「越境行為」だと見られ、越境ということばがはやりだしたと見られる。

2008 年現在、リービ・英雄は日本語で十五冊の本を出しているだ

[1] 『ことば・ひと・越境』会議論文集 東海大学日本語文学系国際学術研討会。

けでなく、数々の文学賞を受賞されている[2]。ちなみに、

1990 年　星条旗の聞こえない部屋　　第 14 回野間文芸新人賞
1996 年　天安門　　芥川賞候補
2005 年　千々に砕けて　　第 32 回大仏次郎賞
2007 年　日本国際交流基金奨励賞

一般的な認識では、日本語・日本文化そのものは日本人のアイデンティティーのよりどころである。外国人が日本語で日本人以上のものを書くことは、日本人のアイデンティティを揺さぶることになりかねない。それが越境行為なのである。リービ・英雄もはっきりと言っている。「外国人が日本語を書くことは、せつなくも本物の越境行為だ」と。

ただ思うに、「日本語の越境」はなにもリービ・英雄だけに限ったことではない。日本語で創作し、日本文学関係誌に掲載され、懸賞や文学賞を勝ち得た台湾人は幾人もいるのだ。ちなみに、

1933　張　文環　落雷　　『フォルモサ』
1934　巫　永福　黒竜　　同上
1934　楊　　逵　新聞配達夫　『文学評論』第 1 巻第 8 号入選二席
1935　呂　赫若　牛車　　同上　　第 2 巻第 1 号
1937　龍　瑛宗　パパイヤのある街　『改造』第 19 巻第 4 号懸賞小説賞佳作[3]
1955　邱　永漢　香港　　第 34 回直木賞
1961　陳　舜臣　枯草の根　　江戸川乱歩賞

である。

このリストから見る限り、張から龍は植民地時代、小説や随筆を

[2] インタネットでリービ・英雄に関する記事を集めたところ、1950 年アメリカに生まれた氏は 5 歳台北、6 歳台中、7 歳はホンコンと外交官の父と転々したあと、父母の離婚でアメリカへ。17 歳に横浜に住む父の元へ。大学はプリンストン大学で日本文学専攻・博士課程を修了した後、プリンストン、スタンフォードで日本文学を教授。1982 年万葉集を英訳し、全米図書賞を受ける。40 歳に教職をやめ、東京に定住。法政大学で教鞭をとるほか、日本語作家として活躍。
[3] 黄　意雯（2007）『日本統治期の台湾文学作品に見る 小説言語』致良出版社。

書いて、日本の文芸誌[4]に発表した日本語作家で、後両者は戦後日本国内で作家として活躍し、今でも日本人から尊敬されている台湾人である。

邱　永漢氏は 1924 年生まれで、東大経済学部を卒業。作家・経済評論家。直木賞のほかに、株やお金儲けに関する著書を出し、「～の神様」と呼ばれている。その他に、邱のイニシャルを取ったと見られるQブックス（全 25 巻）・西遊記（8 巻）・邱　永漢ベストシリーズ（全 50 巻）がある。

陳　舜臣氏も 1924 年生まれで、神戸在住。大阪外事専門学校（今の大阪外大）インド語科出身。1961 年江戸川乱歩賞を振り出しに、小説家・ミステリー作家・時代小説家として活躍。直木賞の 1968 年から作品が日本推理作家協会賞（1970）・毎日出版文化賞（1971）・日本翻訳文化賞（1982）・放送文化賞（1984）・読売文学賞（1988）・吉川英治賞（1991）・朝日文学賞（1992）・日本芸術院賞（1994）などの栄誉に輝き、その他陳舜臣全集 27 巻（講談社）・陳舜臣中国ライブラリー全 30 巻（集英社）がある。

両者とも見事に日本人より「日本語を越境」した者である。

リービ・英雄のことばを借りるとすれば、植民地時代から戦後へと、台湾人が日本語小説を書き、日本国内の文学誌に掲載、受賞されたことは、台湾人のアイデンティティーを表現し、日本人のアイデンティティーを揺さぶったと言えるのである[5]。

ついでだが、中国系女性の楊　逸さんが今年の 1 月、第 168 回の芥川賞候補に名を連ねた。最後には落選したが、外国人の日本語作家として、話題で持ちきりである。43 歳の彼女はハルビン生まれ。1987 年日本に留学。お茶の水大学卒業。大学の中国語教師。日本人と結婚して日本に 20 年住み、このたび 4 万字の小説「王ちゃん」を書き上げたのである。内容は日本人と結婚した中国人妻の異文化生活についての苦心談で、芥川賞の最終選考に落ちたけれども、前途

[4] 『フォルモサ』は台湾人が東京で創刊した日本語文芸誌。同上参照。
[5] 作品の人・時・地・事・物などに多くの台湾語（漢語）を使い、仮名でルビを振っている。註 3 参照。

洋々たるものだと言える。楊さんは、去年 10 月日本文学界新人賞を受け、まさにこれまた「日本語を越境」した外国人である[6]。

ただ、見逃してならないのは、同じ日本語の越境でも、アメリカ人のリービ･英雄と上記台湾人との事情がずいぶん違うと思われる。なぜなら台湾人はここ百年、越境した日本語とは切っても切れない関係にあるからである。

そこで本題に入るが、実は台湾に越境した日本語は 1895 年から 1945 年まで政治的な立場で台湾を植民地として、強制的に「国語」―日本語を台湾人に学習を押し付け、そして二次大戦が終結した 1945 年からは、いろいろと曲折があったが、これまた今までの様相を換え、外国語教育の一環として越境し、裾野の広がりを見せているのである。

次に日本語の台湾越境を二つの時代に分けて、その実態を見てみることにする。

**(一)植民地時代日本語の越境（1895～1945）**

1895 年、日清戦争に負けた中国は台湾を日本に割譲した。台湾が 50 年間日本の植民地となったわけである。

日本にとって植民地経営は未曾有のことであって、日本政府は台湾の特殊事情を考慮した「法律第六十三号」を公布し、台湾総督に絶大の権限を与え、独自の警察制度・司法制度・教育制度を確立させたのである。

とりわけ教育制度において、初代学務部長に起用された伊沢修二は国語である日本語を唯一の統治武器と考え、日本語教育を目下急要の教育関係事項と永遠の教育事業とに分けて画策した。

「日本語の台湾越境」が政治的な力によって始まった次第である。

50 年間の日本語教育、つまり日本語の越境について、私は次のように分けて研究を進めた。

1. 摸索期（1895 年～1919 年）
2. 制度確立期（1919 年～1922 年）

[6] 『亜洲週刊』第 22 巻 5 期。

3. 内台人共学期（1922 年～1943 年）

4. 義務教育期（1943 年～1945 年）

年度別に見たとき、台湾人の日本語教育に対して、総督府はなんと 24 年間摸索をし続けたのある。なぜこんなにも長い時間をかけたのか、と訝しく思うのも無理はない。

実は総督府にとって、植民地経営は未経験だし、新付の異民族に必要以上の教育は災いの元になりかねないのである。第四代民政長官後藤新平は、1903 年 11 月総督府学事諮問会の席上、台湾教育の大方針は本官においても未だ立てていない。そのつど必要に迫り決めつつある状態であると、本心を述べていたほどである[7]。

これで分かると思うが、総督府は台湾人に対して、国語と名乗る日本語の習得と実業人材の養成しか考えず、教育全体に対しては漸進主義を採ったと見てよい。

そこで日本語の習得に関してだが、1895 年 6 月台湾総督府施政式の翌日、伊沢修二が学務部部長心得に就任。7 月に伊沢は学務部を士林の芝山巌恵済宮に移し、士林の郷紳の子弟を集め、日本語を教え始めた。これが台湾における日本語教育の濫觴であり、日本語が台湾に越境したわけである。

このように、台湾における日本語教育は上記芝山巌学堂を始め、翌年（1896）国語伝習所を経て、1898 年正規な初等教育機関―公学校の設置を見た[8]。残念なことに総督府は差別教育を採り、日本人子弟は別に小学校で就学したばかりでなく、普通中等学校である公立中学校の入試問題は小学校の教科目から出題され、かつまた入学枠が制限されるために、台湾人の進学は厳しいというほかはなかった。

1919 年総督府は初めて勅令第一号を以て台湾教育令を公布した。1898 年の台湾公学校官制の公布から 21 年も掛かったのである。

台湾教育令の公布により、教育制度が確立し、中等学校・実業学校・専門学校が整備されたが、これは日本国内との教育格差を是正

[7] 拙著『台湾日本語教育の史的研究』（上）第一章第二節参照。
[8] 同上。

するためのものであっても台湾人子弟のためではなかった。

たまたま日本国内に大正デモクラシーが俄然クローズアップされ、社会運動に伴い、台湾人にも日本人同様な権利待遇を与えるべきだといった民族運動の気風が吹き込んだのである。

総督府はこれを見てか、1922 年に台湾教育令改正を勅令第二十号で公布。「内台人共学制」がとられたのである。

内台人共学とは、読んで字の如く、台湾人が日本人と共学できるということであったが、あくまでも原則論で、台湾人が日本人の小学校や中学校に入学することは厳しく抑えられ、ごく少数の者へ開かれた道でしかなかった。

義務教育がしかれる二年前（1941）、国家非常時体制の下に教育令が改正され、小学校・公学校の区別が廃止、国民学校と改称されても、終戦まで第一号課程表（日本人児童・一部の台湾人児童）・第二号課程表（台湾人児童）・第三号課程表（原住民児童）で区別したほどである。

初等教育は上記のように、台湾人児童は日本人児童と別々に教育を受けたが、中等以上の教育においても 1922 年まで、台湾人の進学の道は閉ざされていた。しかし、その後中等以上の教育を受けた台湾人が増え、程度の差があってもまさしく日本語を越境した者どもである。

ちなみに 1942 年まで各級学校で日本語教育を受けた台湾人の卒業者数を挙げてみる。

初等教育

| | | |
|---|---|---|
| 旧小学校 | 5903 人 | 高等科 1183 人 |
| 旧公学校 | 994055 人 | 高等科 70280 人 |

中等教育

| | |
|---|---|
| 中学校 | 8430 人 |
| 高等女学校 | 8830 人 |
| 師範学校 | 5104 人 |

実業教育

実業学校　　6061 人

実業補修学校　男子 17279 人

女子 2937 人

高等教育

高等学校　　473 人

専門学校　　2254 人

大学　　154 人[9]

ある意味において、差別教育とは言え、上記各級学校の卒業生は、戦後台湾の建設に活躍した人々であり、日本語の台湾越境が如何なる貢献をしたかが分かっていただけると思うのである。

**(二)戦後台湾の日本語越境（1945 年～2008 年現在）**

植民地時代、日本語の台湾越境は政治的な力で国語として強制的に学習を強いたのだが、戦後からは、外国語教育の一環として高等教育に導入された。無論国際交流と異文化理解が前提であった。とは言うものの、その経緯は紆余曲折である。

筆者は戦後日本語の台湾越境を次のように分けて研究を進めてきた。

日本語教育の過渡期（1945 年～1947 年）

日本語教育の暗黒期（1947 年～1963 年）

日本語教育の転換期（1963 年～1996 年）

日本語教育の確立期（1996 年～）

1945 年、ポツダム宣言を受諾した日本は植民地台湾の統治を放棄し、国民政府に渡すことになった。今までの日本語は中国語学習の媒介となって、それなりの役割を果たした。

11 月行政長官陳　儀が着任し、正式の接収完了後、まもなくして中国人官吏や軍人の貪欲と横暴に台湾人は憤慨し、中国語の学習をやめ、自虐的に日本語でやるせない気持ちを晴らした。その恨みが積もり積もって政治抗争事件まで起こした。世に云う 228 事件である。

[9] 拙著『台湾日本語教育の史的研究』（上）第四章参照。

国民政府は躍起になって日本語や日本色を一掃することにし、1947 年 6 月に日本語禁止令を発布した。戦後台湾に居残った日本語が厳しく取り締まられ、1963 年まで暗黒期を迎えたのである。

1963 年、戦後からすでに 19 年、北京語による国語教育が徹底し、若い世代にとって、日本語はすっかり外国語となったのである。国民政府はこれを見てか、大学に日本語学科を正式に開設、外国語教育の一環として、日本語は再び台湾に越境したのである。

転換期を迎えた日本語は歴史的、地縁的な因素によって、大いに歓迎され、これからといった 1972 年、日本が中国との国交正常化で台湾と断交したために、学科の開設が中断された。日本語は敵視され、日本語教師などは肩身の狭い思いがしたものであった。

1980 年代、経済高度成長に伴い、日本語の需要と存在が確認された。そして台湾人出身の李　登輝氏が総統になったと見るや、政治大学を始め次々と日本語学科が増設された。今まで日本語を蔑視していた官庁も各自に日本語人材の養成と名乗って、日本語クラスを設けた。1982 年国家公務員のために、日本語クラスが開講した。国挙げての日本語ブームとなったのである。

台湾の日本語教育が新しい局面を迎えたのは、なんといっても 1996 年、銘伝大学に応用日本語学科が開設されてからのことである。私はそれを日本語教育制度の確立期と称した。つまり、日本語教育の内容がより多元化し、研究指向の日本語文学系と実務指向の応用日語系とに分けたしだいである。私はそれを一般教育体系の日本語教育と技職教育体系の日本語教育と区別しており、二つの違った内容のものだと考えているのである。

それまではよいが、いろいろと問題が起こった。応用と名のつく日本語学科が雨後の筍みたいに増設され、あれよあれよと言う間に、30 箇所も作られたのである。応用日本語科の開設に伴い、日本語教師の需要が急増した。

うれしい悲鳴もつかの間、教師の募集が悩みの種となった。なぜなら、博士学位が必須条件ときめられたのである。学問の分野では、

専攻とか、専門ということばが使われている。具体的に云えば、日本語学科の教師は一応日本語関係の専攻や、専門を必要とする。

はっきり言って、台湾には、今まで日本語教育に関する人材養成はなく、日本帰りの留学生に頼っていたが、一昔前、日本においても日本語教育分野の博士学位をとるのは至難であったのである。

最も、応用日本語学科が急増した時点において、日本語関係の博士学位を持っている者は少なかったわけである。そこでその場しのぎに、専攻分野を問わず、学位さえあれば採用という事態となった。教育当局要求の条件に間に合ったのはよいが、ふたを開けてみたら、なんといろいろな問題にぶつかって、解決策もたたず、今日に至っていることはみんなの知るところである。

問題の解決は、学会組織の役割に頼らずにはおられないが、日本語教師の自覚も必要だと呼びかけたい。

実は先月、台中の静宜大学日本語学科で、台湾日本語教育学会が中部研修会を行った。私も喜び勇んで参加したが、出席者は少なく、さびしい感じがした。

これでは、せっかく日本語が台湾に越境してきても、私たちの手で日本語・日本文化のくぐり戸を自由に往来できる人材の養成が望めない。一緒に反省したいものである。